都市住宅団地における高齢者の医療アクセシビリティの現状と課題

ーA 県 B 団地における調査の結果からー

○　県立広島大学　　氏名　湯川　順子（003037）

田中　聡子（県立広島大学・006587）

キーワード：高齢者　都市住宅団地　医療アクセシビリティ

１．研 究 目 的

本研究の目的は、都市部住宅団地における高齢者の医療アクセシビリティの現状と課題について明らかにすることである。急速に高齢化が進む都市部では、住み慣れた地域で安心して暮らし続けるためのしくみとして、医療や買い物など日常的な生活環境の整備と合わせて、アクセシビリティが課題になっている。

高齢者は何らかの慢性疾患をかかえ、治療やリハビリを長期にわたり継続していく必要がある人が多い。健康に不安があったり、気になるところがあったりする段階で医療や介護サービスにアクセスしやすい条件や環境を整えることは、高齢者本人の健康の維持というミクロなレベルで重要であることはいうまでもなく、早期のアクセスにより結果的に医療費の抑制効果も期待できる。

医療アクセシビリティに関わる先行研究としては、経済的理由からの未受診（日本医療政策機構 2007）や医療アクセシビリティの不安（同 2010）が明らかにされている。また、受診抑制の要因として低所得や時間的制約が明らかになっている（阿部 2017）。アクセスの遅れにより治療が間に合わなかった「手遅れ死亡事例」の検討によって、死亡事例では経済的問題と合わせ、相談相手がいなくて孤立しているという特徴が指摘されている（竹本 2016）。そして、地理学や都市計画などの分野では、立地や公共交通の整備などの物理的な視点からの研究がある。このように、医療アクセシビリティの阻害要因として、先行研究からは経済的、物理的、社会関係的要因が示唆される。しかし、都市部の高齢者に焦点を合わせた研究は少なく今後の課題となっている。

２．研究の視点および方法

公共交通機関が整備され医療機関が存在し、物理的、地理的要因でのアクセシビリティに問題がない地域の住宅団地の住民を対象とした無記名の自記式アンケート調査を実施した。調査票は一軒につき一部とし、配布と回収は町内会の協力を得た。調査期間は 2017 年 12 月 13 日～23 日である。本報告では、有効票のうち、65 歳以上の高齢者のデータを使用する。

※なお、本調査研究は、県立広島大学重点研究事業・地域課題解決「医療ソーシャルワークにおける医療福祉アクセシビリティ阻害要因に関する研究―重層的生活課題解決プログラムの開発―」（研究代表者：湯川順子、共同研究者：田中聡子）の一部として実施した。

３．倫理的配慮

本研究を進めるにあたっては本学会の倫理規定を遵守するともに、調査の実施について県立広島大学の研究倫理審査を受け承認を得た（承認番号：第 17ＭＨ041 号）。

４．研 究 結 果

調査票の配布数は 984 で、配布数に対する有効票の割合は 44.0%であった。本報告では年齢が 65 歳以上のデータ 317 を用いる。

(1)分析対象者の特徴

性別は、「男性」62.8%、「女性」37.2%であった。同居の家族は「あり」が 83.6%で一人暮らしの高齢者は少なかった。世帯の経済状況をたずねたところ、余裕がある世帯が 44.5%、余裕がない世帯が 55.5 であった。また、高齢者ではあるが、16.7%が「働いている」と回答している。住宅は、9 割以上が「一戸建ての持ち家」であった。日常生活の移動手段（複数回答）は、「自家用車（自分で運転)」が 59.3%と最も高く、「徒歩」46.4%、「バス」39.1%、「電車」35.6%などとなっている。

主観的健康を 4 件法でたずねた結果、「まあまあ健康である」が最も多く 65.0%であった。頼りになる人や具合が悪いときの相談相手は 9 割近くが「いる」と回答している。相談窓口として「学区社会福祉協議会」は 79.8%、「地域包括支援センター」73.2%、「医療機関の相談窓口」56.8%が知っていると回答している。

(2)医療へのアクセスの状況

定期的な外来受診をしている人は、74.4%（236 人）で、継続的な医療へのアクセスが必要な人たちであることが分かる。その内、過去 1 年以内に外来受診を中断したことがある人は、12 人であった。同様に、入院の延期・中止をした人は、6 人であった。また、過去 1 年以内に気になるところがあるのに、受診しなかったことがある人は 8.8%（28 人）であった。その理由をたずねたところ、「どの医療機関に行ったらよいか分からない」、「病院に行くのが好きではない」、「費用がかかる」、「待ち時間が長い」などとなっていた。

５．考 察

先行研究では、医療アクセシビリティについて、経済的要因や相談相手がいないで孤立しているというような社会関係的要因、物理的要因が指摘されていた。調査に回答した高齢者は、定期的な外来受診の率が高く、継続的な医療へのアクセスが必要な人たちであった。気になるところがあるのに受診しなかったことがある人の理由からは、先行研究と同様の経済的理由に加え、待ち時間の長さやだけでなく、「どの医療機関に行ったらよいか分からない」という医療アクセシビリティのソフト面とでもいうべき課題が浮かびあがった。